

子どもと共に創りあげる学級経営

—学習意欲を高める工夫を通して—

目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究の仮説	42
III	学習意欲を高める学級経営の構想図	42
IV	研究の内容	43
1	学級経営について	43
(1)	学級経営の意義と内容	43
(2)	学級経営の基礎	44
(3)	学級経営の視点	45
(4)	学級経営の展開に当たって(子どもと向き合う担任教師の姿勢)	46
2	学級経営と学習意欲	46
(1)	新学力観と学習意欲	46
(2)	学習意欲を高める学級経営	48
3	学級経営の実際	50
(1)	学級経営案の作成	50
(2)	学級経営の年間計画	52
(3)	学級経営の評価	55
V	授業の実践	55
1	単元名	55
2	単元目標	55
3	単元設定の理由	56
4	指導計画	57
5	本時の学習	57
(1)	本時のねらい	57
(2)	授業仮説	57
(3)	本時の展開	57
6	授業要旨の流れと考察	58
(1)	授業仮説①の検証	58
(2)	授業仮説②の検証	59
VI	研究の成果と今後の課題	60

子どもと共に創りあげる学級経営

— 学習意欲を高める工夫を通して —

宜野湾市立志真志小学校 教諭 比嘉靖恵

I テーマ設定の理由

社会情勢のめまぐるしい変化に伴って価値観が多様化している今日、教育の世界もめまぐるしく変化している。最近の教育の動きでは、新学力観が提唱されているように、大量な知識の獲得よりも、学習者の学びの心や力が重視されるために学習意欲が強調されている。また、一斉指導で効率よく授業することよりも、体験学習や個別化など学習の多様化を進めながら、個性を伸ばす教育が求められている。このような時代にあって、教師の役割は当然変わってくるし、学級経営の仕事もまた新しい教育の観点に立った見直しが必要である。

しかしながら、新しい教育の場になっても、学級の意味は大切であることに変わりはない。子どもは「学校へ行く」といって毎朝家を出ながら、意識の中では「学級へ行く」という気持ちに包まれているし、担任もまた「私の学級の子どもたち」という意識が強く、両者の意識が「学級」としての基盤を強固に形成している。したがって、学級（＝学校）は楽しい場所であってほしいという子どもの切実な願いを担任は正しく受け止める必要がある。そのためには、学級生活や授業を見直し、より豊かで充実したものに創り変える努力が必要であると考えます。

これまでの自分自身の実践を振り返ると、意欲のある学級づくりは大切であると考えながら、実際には自律的な学級づくりを忘れていたのではないかと、「自己流」や「成り行き」なやり方ではなかったか、個を生かすことが不十分だったのではないかと反省される。「学級経営」というからには、明確な目標を持ち、計画を立て、実践したら評価し、今後の目標や計画に反映させるという一連の流れがあるべきである。そうすれば、目標に向けた実践活動が深化し、豊かな学級経営の実現が期待できるのではないだろうか。

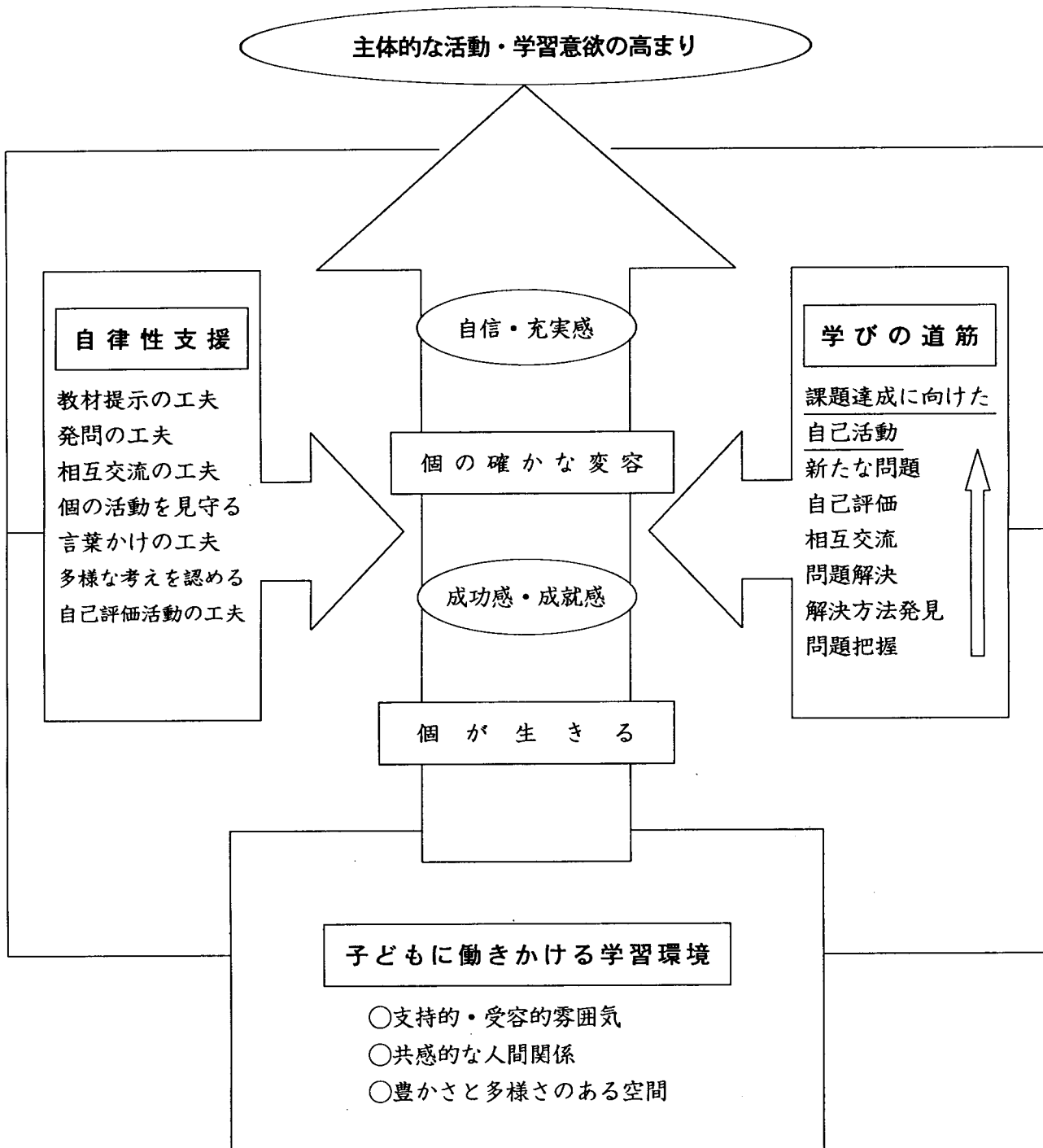
新学力観との関連で最近注目されているのは、学級の雰囲気に関してである。子どもが友達と協力しあいながら自分を発揮することが認められ大事にされる支持的風土あるいは受容的風土の中でこそ「生きる力」は育っていく。このような学級の風土は、単に学級生活の場面だけでなく、授業を支える基盤ともなっていく。

また、授業を通して、教師と子ども・子ども同士が、互いに認め合い向上的に変容していく体験を積んでいくことにより、自信がわき、それが自己教育力の基礎となっていく。このことから、学級もまた担任の行為によって豊かに成長・発展するものであるという考え方に立ち、子どもの豊かな成長を願った創造的な学級へと教師自身も変容を遂げるべきであると考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 学習活動の場において、考えや思いが大切にされ安心して発言できる雰囲気を作れば、主体的で積極的な活動ができるであろう。
- 2 授業の過程において、自分なりの課題を持ち、追求し、相互交流する場を設定し成功感や成就感を味わわせれば、学習意欲が高まるであろう。

III 学習意欲を高める学級経営の構想図



Ⅳ 研究の内容

1 学級経営について

(1) 学級経営の意義と内容

【学級】

学級において児童・生徒が日常的な学習や生活を行う場であるとともに、教師が学習指導や生活指導を行うための集団である。一言で、学校における教育活動のための最も基礎的な単位となる集団であると定義することができる。

◇児童の学校生活の基本的な生活基盤。

◇同年齢の者同士が一緒に生活し、互いに助け合い励まし合い磨き合いながら成長する場。

◇アットホームで、集団を運営できる自治的な権利を一人一人が有している。

◇児童の自主的・主体的な運営を支援・助言・指導する担任教師が存在する。

◇集団を構成するメンバーの個性を尊重し、個々のよさを互いに伸長させるような雰囲気を持つところに学級集団としての存在理由がある。

【学級経営】

狭義の解釈は、学級での教育活動を含めないで、教室経営、学級事務、家庭連絡等の条件整備や子どもの管理に関わる部分に限定する考え方。その場合、学級を中心に行われる学習指導や生徒指導を「学級教育」の言葉で呼んだりしている。

しかし、学級での様々な教育活動や担任の多様な仕事の内容を考えれば、狭義の解釈では十分でない。そこで、学級で行われる教育活動と条件整備事項は担任の仕事として離れがたく結びついているとして、学級で行われるすべての教育活動、つまり学習指導や生徒指導を含めながら、さらに学級担任の行う活動を総称して学級経営と呼ぶ、広義の解釈が生まれた。

◇ **基本的事項**…学級目標の設定、子どもの実態把握、学級経営計画の作成、学級の諸活動・係活動の組織、学級経営の評価と改善など。

◇ **指導領域的事項**…学級における教科・道徳・特別活動の効果的な指導・運営、日常生活の指導など。

◇ **個と集団指導的事項**…集団内における個の把握と援助、教師と子どもの人間関係、学級集団づくり、生徒指導、教育相談など。

◇ **経営条件的事項**…教室経営、学級事務、学校・学年経営との連携、父母・地域との連携など。

◇ **重点的事項**…その学級で特に力を入れて指導している内容あるいは特色のある活動など。

(2) 学級経営の基礎

① 学級集団における子ども理解

学級経営を支える基盤となるのは学級担任自身の有する子ども観であり、様々な側面から子どもをトータルに捉えて理解を図ることが学級経営の基本である。一般に、子ども理解には客観的理解や共感的理解などがあるが、その客観的理解にしても、単に様々な各種テストなどの活用によるデータの収集にとどまらず、子どもたちの実際の生活に注意を払い、身近なところから理解を図ることが大切である。例えば、より観点をしぼった観察や随時の面接、日記や作文なども学習と生活を円滑に進めるための情報であると考ええる。

② 学級生活の設計（計画・組織）

学級経営も計画・実施・評価というマネジメントサイクルの考え方が基本になり、目標を設定し、計画を立案し、組織を編成することから始まる。

目標を設定する際は、学級の目標を学級経営の全体構想の中でどう意識し、いかに指導していくかを押さえる必要があり、子どもたち一人一人が、何らかの意味で『私が作った』という思いを強く印象づける学級目標づくりが大切である。

学級経営案の作成・活用に当たっては、子どもの発達段階・人間関係などの様々な情報を活用して指導方針や方法を選択する、学級経営案の一連のプロセスを確立しておく必要がある。

学級内の組織を作るに当たっては、座席を決めるにしても、学級の係活動に当たっても、人間関係に配慮して子どもたちの心の中に安定感を育てることが基本になる。そのためには、ソシオメトリックテストやゲスフーテスト等、心理的な傾向を把握するための情報が有効であると考ええる。

③ 学習環境の整備

教室環境は、何といっても子どもたちが落ち着いていられることが一番大切であり、学習のための環境を整備する事も学級経営の重要な柱である。計画性のある環境整備が必要である。

〈教室経営のプロセス〉

第一段階	第二段階	第三段階	第四段階
子どもたち自身が、その学年なりに学級の目標を共有し主体的に関わることができるよう、教師が積極的に働きかける段階。一人一人の願いを生かしていく。	教室で学び合う子どもたちが互いのよさを理解し合う段階。安心して自分らしさを発揮できるような学級風土をめざした環境づくりが重要。	子どもたちが互いのよさや可能性を積極的に生かそうとする段階。活動の場と時間を保障し、活動を認め励ます。	子どもたちの積極的な働きで学級の歴史や文化が形成される段階。一人一人の成長を互いに喜び合える環境づくりが、新たな原動力となっていく。

④ コミュニケーションの促進

学級経営上のコミュニケーションには、まず、学級担任と子ども、子ども同士の人間関係が考えられるが、保護者の気持ちをとらえ学級経営に対して理解と協力を引き出す観点から、学級通信もその具体的手段である。私の場合、学級通信の発行に当たっては、「学級の文化の共有」「父母への情報公開」「担任の実践記録」という意義を念頭においている。

⑤ 学級経営の評価

学級経営は、学校や学年との関わりを図りながらその学級独自の目標を持ち、一定の計画のもとに進められていくものである。したがって、学級経営の進展に応じて適宜、目標達成の診断や実践活動の有効性について評価することが大切になってくる。評価するに当たって基本となる着眼点は次のように考えられる。

ア 子どもの変容をとらえる。

「どのように関わってきたのか」という観点に立ち、担任として立案した計画や実践を振り返り、子どもに与えた効果について検討する。

イ 子どもの内面を理解する。

知的側面の評価ではなく、子どもの興味・関心・意欲など、情意的側面までも重視した評価に努める。

ウ 好ましい人間関係を確立する。

常に、担任と子ども、子ども同士、子どもと学級集団との関わりで評価を考えていく。

※具体的には55ページを参照

(3) 学級経営の視点

① 子どものよさや可能性を生かす。

一人一人は、それぞれ能力・適性・興味・関心が異なり、それぞれが様々な可能性を内に秘めている存在であるにとらえ、一人一人のよさや可能性を生かすために、個に応じた指導を基本にして学級経営を進める。

② 支え学び合う学習活動を展開する。

個性の育成は、子どもたちが活動を共にし、互いに支え合い、学び合うことによって充実する。したがって、学級経営に当たっては、子どもたちが様々なグループを構成し、友達と協力して活動する過程で、自分で考え、判断し、試みるなどの機会や場を増やすよう留意する。

③ 個に応じた指導を推進する。

個人差が多様な子どもたちに学習を成り立たせ、自ら学ぶ意欲を持ち、個性を生かす指導を充実するために、自ら学ぶ目標を定め、主体的な学習の仕方を子どもが自らの力で身につけるよう支援し、個に応じた指導を工夫する。

④ 活動を支援する。

子どもたちによる主体的な活動を展開するために、友達と協力して活動している姿を温かく見守り、さらに伸ばすために適切に支援する。また、任すことができない内容は明確にし、それ以外は、できるだけ子どもの発想を尊重して活動の場と機会を与える。

⑤ 課題意識を持たせる。

子どもにとって学級生活を意義あるものにするためには、一人一人の子どもが学級集団の一員としての自覚を深め、学級生活の充実と向上を目指して様々な問題を主体的に解決していこうとする構えを培うことが大切である。自分たちの学級生活を充実し向上させるために、学級内にどのような問題があるのかを見だし、それらをどのように解決していくかなど子どもが課題意識を持ち、積極的に諸問題に取り組もうとする意欲を育てる。

(4) 学級経営の展開に当たって（子どもと向き合う担任教師の姿勢）

① 人間関係を深めることの大切さを問いつづける。

学級において問われる学級担任の指導性は、子どもたちに考えさせ、自分で何かを得たという経験を通して自信を持たせることであり、クラスで協同して一つの物事を達成したという充実感や満足感を味わわせることである。そして、これらを通して子どもたちの間に共感的な人間関係を育てることである。

② 共感的交流の大切さを確認する。

学級担任は、子どもの成長を間近に見ることができるところにいる。それは裏を返せば、担任もその生き方を子どもたちによく見られるところにいるということである。その意味で、年齢の開きはあっても、人生という共通の土俵に立って共に歩いていくという共感的な交流があってもよいと思われる。

③ 出会いの大切さを確認する。

学級担任が基本的にふまえるべき態度は、たった一度の運命的な出会いを自覚し、その子どもとの共感的な人間関係を育てていくことにある。学級における子どもたちとの出会いの喜びを大切にし、それを豊かに育て深める学級経営の展開をしていきたい。

2 学級経営と学習意欲

(1) 新学力観と学習意欲

① 学習意欲とは

新しい学力観とは、子ども自らが意欲的に学ぶ態度や思考力、判断力、表現力、さらに実践力などの能力の育成を重視しようとする考え方であり、学習意欲は新しい学力観に立つ教育のめざす中核をなすものである。学習意欲には、次のような内容を含んでいる。

ア 学習に対するやる気

子ども自身が学習の問題解決に能動的に関わろうとする気持ちや意思である。

いくら価値のある教材を提示しようと、それに対して主体的に関わり取り組もうとする意思が子どもたちに醸成されていない限り、教材は子どもにとって価値のある切実なものとはなりえない。子どもが自らの問題意識に基づいて、教材に進んで関わり、自らの学習活動を展開していこうとするやる気は、内発的な動機づけによる。そのためには、意欲を誘発する教材や発問を開発するとともに、学習環境を整えること、さらに教師の共感的、受容的な関わりが重要である。

内
発
的
学
習
意
欲

◎好奇心…「どうも気になる」という内的状態。

対象への注目・接近・探索を促す。

◎興味・関心…「知りたい・わかりたい・できたい」という願い。

好奇心を、より主体的・能動的に起動する。

◎こだわり…「どのように知りたいか」という、対象との関わりにおいて大切にしたいこと。

イ 学習に対する自信

学習を通して子ども一人一人が自信を味わうことである。自信を持つようになることは、学習していることに対して成就感や満足感を持ち、次の学習への期待感を育てることにつながる。自信は内発的に湧き出てくるものであるが、承認や賞賛など周りからの働きかけによって更に高められる。そのためには、教師が子ども一人一人の成長の様子や進歩の状況を具体的に見取り、その意味づけや価値づけをして言葉かけをするなど、子どもにフィードバックさせることである。自分の学習活動の軌跡が周囲から認められることによる学習集団における存在感は何よりも嬉しいことであり、そこから生まれた自信は学習意欲そのものである。

ウ 学習に対する持続性

意欲は一時的なものであったり断片的なものであってはならない。大切なことは、学び続けるということである。子どもたちが学習に対して見通しを持って問題解決を連続的に進めていけるようにするためには、学習活動を作っていくのは自分自身であるという自覚を持つようにするとともに、その学習体験を通して学習への自立を育てることである。自らの問題を解決していこうとする意思と、そのために必要な能力や知識を身につけることが大切である。このことは子ども一人一人に学習の自立化を図ることであり、言い換えれば子どもたちに自力解決力を育てることである。

② 学習意欲を高める言葉かけのポイント

ア 子どものよさを認め励ます

子どものよさとは、その子どもの個性のすべてである。その子どもらしさや発想、考え方などを認め励まししながら、それらがその子どもなりにさらに発揮できるように子ども一人一人に関わることが意欲を育てる支援のあり方である。

授業の中では、子どもたちの思いを大切にし、子どもたちが考えた学習の手だ

てや方法等を共感的に理解し、どこがどのようによいのか、どうすればもっと工夫できるのかを支援すること。それは、一人一人が意欲的に考えたり、判断したり、表現したりする資質や能力を獲得することの支援である。

イ 学習の状況に応じて次への活動の方向を具体的に支援する。

単なる「頑張りなさい」というだけの叱咤激励では、子どもの意欲は内発的に高まらない。子どもの目の高さで助言や支援をすることが大切である。このことは、教師が子どもの学習状況を的確にとらえ、それぞれに適切な支援を行っていくことである。しかも、一人一人の学習状況に応じて、次の学習の方向や方法が見出せるように具体的に関わることである。学習過程においては、子どもの様々な表情、つぶやき、行動などが学習状況の表れである。その背景にある思いや願い、見方や考え方等を共感的に理解し、適切な支援を行う。授業は、こうした即時的な評価と支援の連続であると考ええる。

(2) 学習意欲を高める学級経営

① やる気が育つ学級集団づくり

学級活動が魅力的で子どもの意欲を誘発するためには、楽しく、充実感が得られるものであることが必要である。そして、活動の中で友情を深め合い、一人一人の学級への所属感を得させる。また、自分たちで集団活動を運営する能力を育てる。なぜなら、子どもたち自身が学級集団の主人公であるためには、学級集団を自分たちで運営する自治的な能力が不可欠だからである。自治的な行動ができるためには、自治的に活動するとはどういうことであり、どのように行動すればよいのかを教えなければならない。

ア 民主的な運営の仕方を教えること。

具体的には提案の仕方、討議の仕方、決定の仕方、実行の仕方である。

イ 民主的なリーダーシップとフォロアーシップを教えること。

ウ 配慮を要する子への対処の仕方を教えること。

上記のような教えるべきポイントを、最初は教師自身がモデルとなってやってみせ、次に、力のある子どもたちをリーダーとして押し出していく。やがて学級集団が高まり、学級成員の大部分がリーダーとなりうるようになるに伴って、子どもたちが自分たちで決められる領域を次第に拡大していくであろう。子どもの意欲を育てるような学級集団とは、全体として望ましい学級集団の形成をめざさなければならない。

② 子どもに働きかける環境づくり

子どもたちにとって教室は集団生活の母体であり、その環境は子どもたちの意欲にも大きな影響を与える。教室環境を高めるには、「学習者であり、生活者である」子どもたちを中心にした「子どもに働きかける環境づくり」が望まれる。子どもに働きかける環境には、次のような内容がある。

ア 学習や活動の意欲を喚起する働き

「知りたい」「調べたい」「やってみたい」という、自ら学ぶ意欲を喚起する働き。

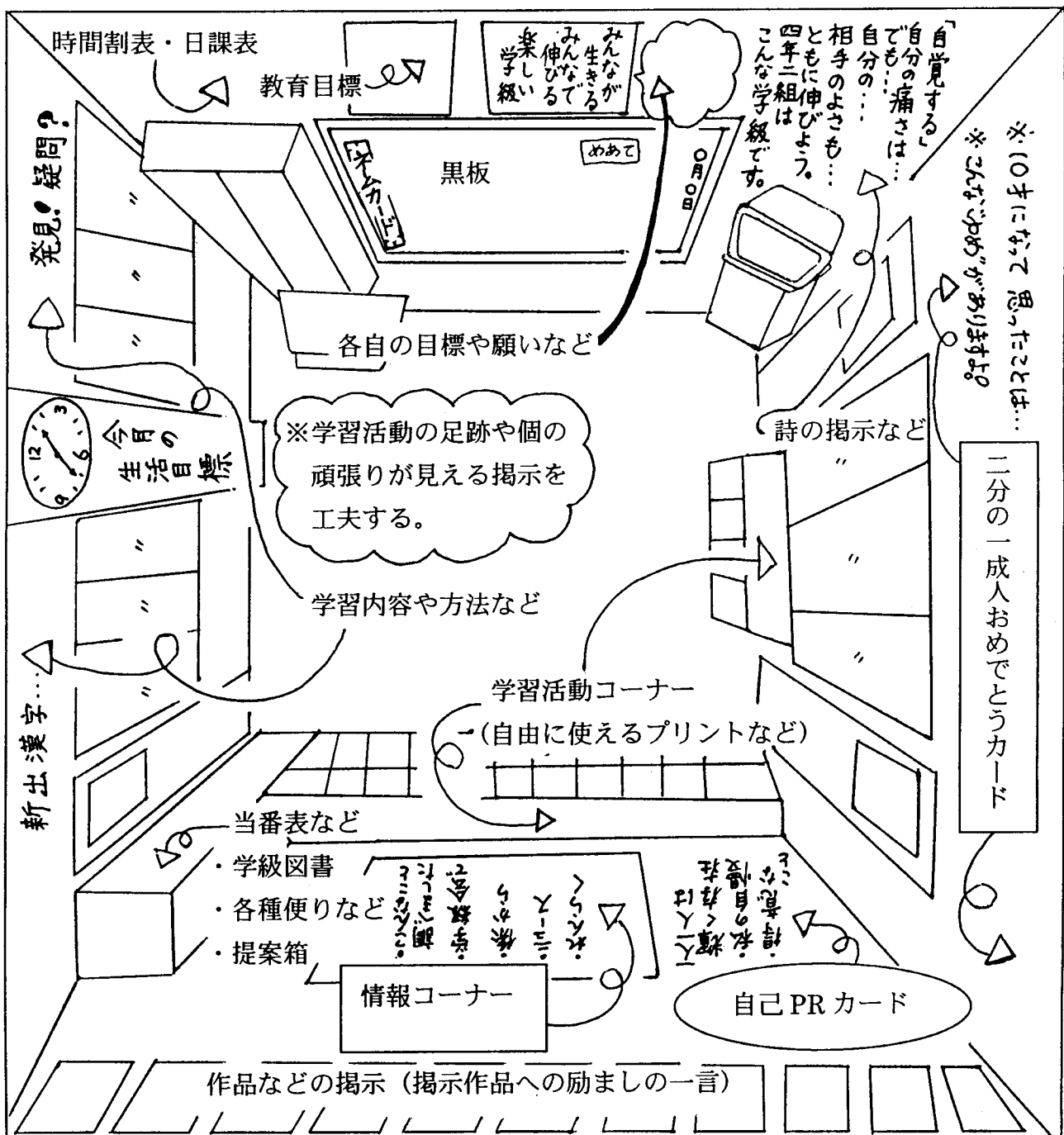
イ 学習や活動を実践・継続・発展させる働き

「学習課題」「活動を認められた喜び」「できた・分かった喜び」「新しい発見・疑問」等、活動のエネルギーを与える働き。

ウ 人間としての基礎・基本（生き方・学び方）を語りかける働き

スローガンや詩、学習の仕方、人間としての生き方を語りかける働き。

※子どもに働きかける環境〈掲示を中心として〉



③ 楽しくわかる授業づくり

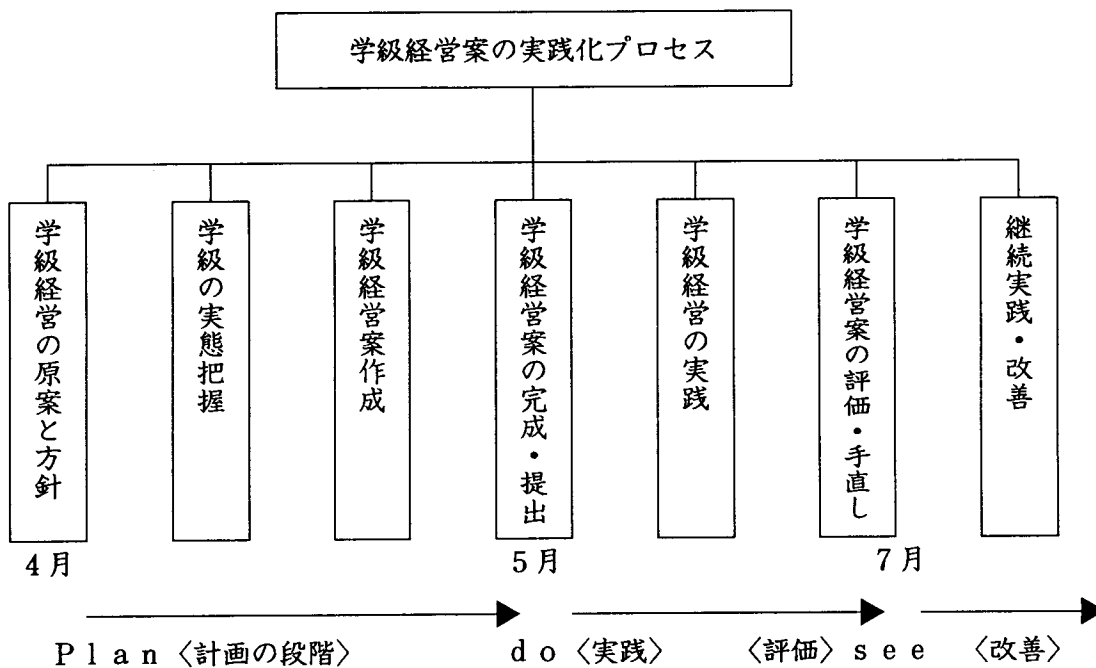
授業が子どもにとり魅力的で意欲をわきたたせるものとなるためには、まず第一に子どもに「わかる」授業でなければならない。第二に、子どもがあたかも主導しているかのように感じられる「参加感のもてる楽しい」授業でなければならない。そのためには、次のような授業の構想が必要である。

- 基礎から着実に積み上げていく授業。 ○ 子どもの問題意識に密着した具体的な授業。 ○ ゆさぶりや未知への探求など挑戦と内発的動機づけのある授業。
- 討論など知的な競り合いを含む授業。 ○ 個人思考と集団思考の組み合わせなど変化のある授業。 ○ 演じたり作ったり実際にやってみるなど、頭だけでなく体を動かす授業。 ○ 教え合いなど友達同士の援助を含む授業。 ○ 遊びやゲームなどを含む柔軟な授業。

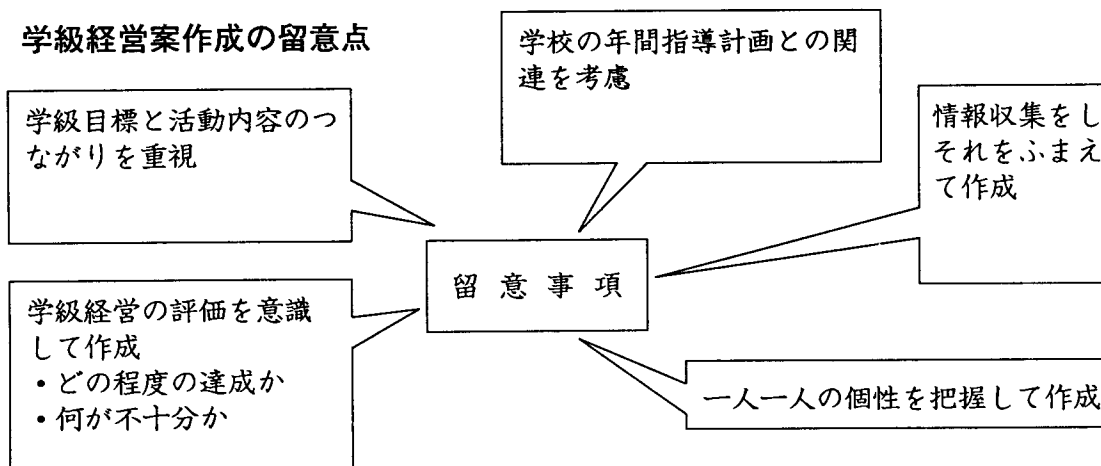
3 学級経営の実際

(1) 学級経営案の作成

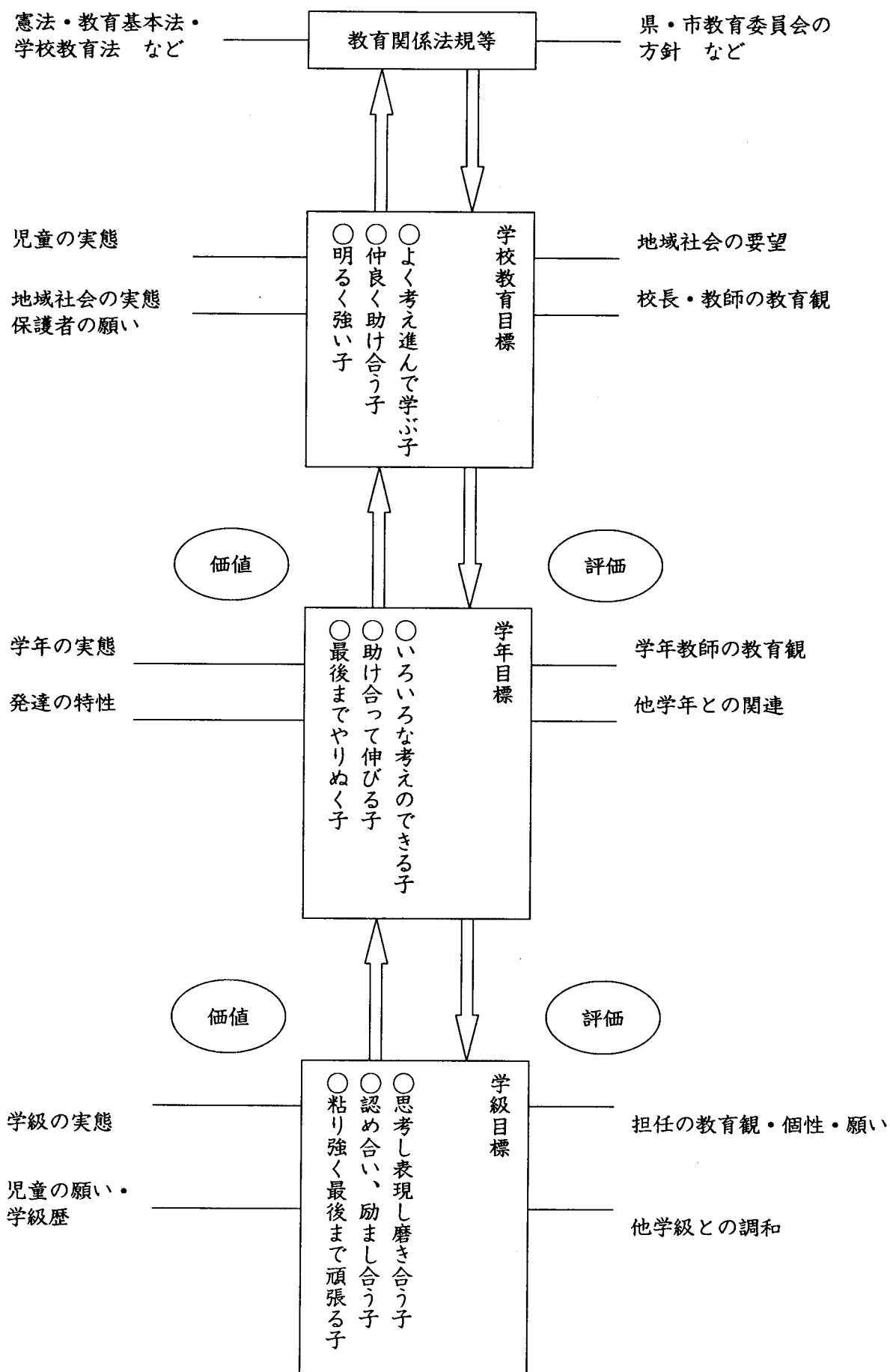
① 作成に当たっての見通し



② 学級経営案作成の留意点



③ 学校教育目標と学級目標の関連



(2) 学級経営の年間計画

① 一学期経営計画

月	行事◇学校・学年 ◆学級	学級づくり・児童理解	学 習 指 導	今月のポイント
4	◇始業式 ◆学級びらき ◆学級のめあて づくり 「みんなが生きる みんなで伸びる 楽しい学級」 ◇家庭訪問	○教室環境づくり ○学習・生活班づくり ○係・当番の分担 ○朝会・終会の進め方 ○学級の約束決め ○自己PRカード ○読み聞かせ開始 ●作文「私の先生」	○前学年までの経験・ 既習事項の確認 ○学習の約束を決める。 聞き方・話し方 ノートのとり方 ○自主学習の取り組み 方 ●「ガオーッ」	○いい出会いを作る ○願いを明示し一貫さ せる。 ○家庭訪問や作文をも とに、子どもの姿を 知る。 ○安心して学習や生活 ができる環境づくり。
5	◇春の遠足 ◇一年生を迎える会 ◇避難訓練(地震) ◇プール清掃 ◇初潮指導 ◇校外学習 清掃工場 下水処理場	○学級の具体的目標を 話し合う ○係・当番活動のチェッ ク ○学級の文化づくり開 始 ・詩の暗唱 ・歌「まあい命」 ●作文「私の家族」	○「わかりません」 「もう一度言ってく ださい」を使う練習 ●詩を読もう	○一人一人の願いが学 級の願いになるよう に ○朝会・終会の充実 ○一人一人の頑張りを 学級通信で知らせる。
6	◇プールびらき ◆第一回学級会 ◇学年PTA行事 親子ドッジボール大 会 ◆慰霊の日に向けて ◇校外学習 消防署見学	○水泳の目標を立てる ○話し合いの仕方 「ディベート学習」 ○親子ドッジボール大 会に向けての練習計 画・応援練習 ●作文「私の友達」	○一学期の学習の充実 期 学習のおもしろさが わかるような授業の 工夫・ノート指導 ●「白いぼうし」	○向上の事実を実感さ せることで所属感・ 連帯感を強くする。
7	◇七夕集会 ◇大掃除 ◇終業式 ◆「わり算博士認定証」 「25メートル完泳 証」の発行	○七夕集会の飾り付け ○「一学期、こんなこ とがあったよ」 ○「友達のいいところ みつけた」 ●作文「自由題」	○一学期のまとめ 定着させるための手 立て ○「やればできた」と いう自信になるもの をつかませる。 ●「吉四六話」	○「一人一人のよさ」 と「学級のよさ」を 光らせる。 ・プロを認定する。 ・長所メッセージを 交換する。 ・いい学級だと実感 させる。

※ 学級づくりの重点
新しい仲間のよさをみつけよう。

② 二学期経営計画

月	行事◇学校・学年 ◆学級	学級づくり・児童理解	学 習 指 導	今月のポイント
9	◇始業式 ◇夏休み作品展 ◇陸上競技大会 ◇運動会練習	○夏休み報告会 「とっておきの話」 ○班編成替え ○自主的な係活動への 取り組み ○学級として、運動会 に向けての作戦 ●作文「私の得意なこと」	○夏休み後の学習態勢 を早くつくりあげる。 ●「アナトール工場へ 行く」	○夏休みの生活体験を 交流し、友達から学 ぶ。 ○生活のリズムを取り 戻す。 ○係活動の活性化 ・学級のためになる 活動を自由につく る。
10	◇運動会 ◇読書月間 ◇校内童話・お話会 ◆学級PTA行事 「私の十八番」	○運動会へ向けての準 備 ○学級PTA行事に向 けての取り組み ・自分たちの力で運 営する。 ●作文 「私が出会った本」	○二学期の充実期 ・班学習 ・調べ学習 ●「一つの花」	○自主的な学習を計画 し、学ぶ楽しさをど の教科でも味わえる ようにする。 ○行事などを通じ友達 との関係をより深め る。
11	◇社会見学 ◆勤労感謝の日に向 けて	○社会見学の班づくり ○一人一人が生きる班 活動の確認 ●作文「家での仕事」	○社会見学に向けて、 学習の計画と見学を 終えての新聞づくり ●「方言と共通語」	○行事ごとに自分のめ あてをしっかり持た せて取り組ませる。 ○家族の中での自分の 存在を意識させる。
12	◇避難訓練（火災） ◇終業式	○一人一人が生きる班 活動の確認 「班のまとまりを見 せよう会」 ○お互いの頑張り認め 合う ・学習を通して ・行事を通して ・学級での役割を通 して ●作文「今、困ってい ること」	○二学期のまとめ ・自主的な取り組み ができたか。 ●「一本の鉛筆の向こ うに」	○二学期を振り返り、 自分の成長を見つめ させる。 ○作文から、子どもの 悩みを引き出す。 ・問題解決週間の取 り組み

※学級づくりの重点…仲間と考えを出し合い、自分の考えを広げよう。

③ 三学期経営計画

月	行事◇学校・学年 ◆学級	学級づくり・児童理解	学 習 指 導	今月のポイント
1	◇始業式 ◇演劇鑑賞 ◇学芸会	○班編成替え ○室内遊びの工夫 ○学級目標にどれだけ近づいているかの点検 ○学芸会への取り組み ○思い出づくり作戦の開始 ●作文「初体験の感動」 (知る・聞く・見る・分かる・行く)	○これまでに培った力を出させていく。 ・ノートづくり ・自主学習 ・学び合い学習 ・調べ学習 ●「ごんぎつね」	○別れに向けて学級を高めていく。 ○四学年のまとめの学期であると同時に五学年に進級する準備の学期であることを自覚させる。
2	◇児童会役員選挙 ◆二分の一成人式 ◆鬼退治作戦	◇二分の一成人式のための準備 ●作文「一年間の成長」 (学力・能力・対人関係)	○学習の主人公である自覚を持たせる。 ・学習課題や学習予定について意見が言える。 ●「四年一組物語」	○十歳という区切れを記念して、これまで世話になった親への感謝の気持ちを二分の一成人式集会で表す。
3	◇六年生を送る会 ◆学級お別れ会 ◇卒業式 ◇修了式 ◇離任式	○六年生を送る会準備 ○学級お別れ会に取り組む。 ○文集づくり	○まとめの学習 ○四年生卒業試験 ・子どもが作った各教科のテストを子どもが受ける。	○一年間を振り返り、自分の成長や友達の成長を確認する。 ○心に残るお別れ会を!! 一年間かけて築いたお互いの強いきずなを確かめ合う。 ○次の学年への希望を持たせる。

※ 学級づくりの重点

仲間とつくってきた活動のふり返りをしよう。

- ・自分たちが大切にしてきた願いとは。
- ・活動のふり返りと新たな動きを生む場の充実。



(3) 学級経営の評価

① 児童理解に関して

子どもの言動を共感的に受け止め、教師として適切な反応を示しているか。
一人一人の希望や願い、興味関心をとらえる工夫をしているか。
どの子ども、先生は自分のよさを知っていると信じるような交流を図っているか。
子どもが好きで一緒になって談笑したり遊んだり、作業などができるか。

② 学級の活動、雰囲気に関して

一人一人が学級の中にいるのが楽しいと感じているか。
友達のよさや考え方の違いを認め合うような雰囲気ができているか。
一人一人のよさが発揮されるような場や機会を設定しているか。
よさが認められたと自覚できるよう、級友が評価できる場を設定しているか。
学級全員が協力して成果を味わえるような活動の場や機会を設けているか。

③ 学習指導に関して

子どもの願いや思いを生かすための支援のあり方を工夫しているか。
多様な解決を促進するような学習材や学習環境を整えているか。
意欲的に学習するために、体験的な活動や問題解決的な学習を行っているか。
課題の解決に必要な学習情報を適切に提供し、意欲的な学習を支援しているか。
個に応じた資料や助言等、一人一人を生かす手だてを工夫しているか。

④ 教室環境づくりに関して

担任教師や子どもたちのアイデアを生かそうとしているか。
学びやすく楽しい学習環境にするために掲示物などに配慮しているか。
積極的に活動できる場を確保し、温かく見守ったり、援助をしているか。
係活動やグループ活動の工夫を通して、活動意欲を高めようとしているか。
お互いのよさを発見しあえるようなコーナーの設置を工夫しているか。

⑤ 家庭・地域との連携に関して

記録を丹念にとり、いつでも資料として保護者に連絡することができるか。
受容的な態度や共感的理解を基盤として保護者の立場になって接しているか。
保護者会では、具体性のある話し合いの雰囲気を作ろうとしているか。
授業参観では、教育のあり方について理解してもらうよう授業展開をしているか。
学級通信は、公平で読みやすくするよう工夫しているか。

V 授業の実践

1 単元名 国語科「世界に目を向けて、海外特派員になろう」

2 単元目標

- (1) 記録文・報告文などを読んで、読書の範囲を広げることができる。
〔国語への関心・意欲・態度〕
- (2) 写真と文章を照応させたり、表に整理したりしながら読み取ることができる。
〔表現の能力・理解の能力〕
- (3) 必要な情報を集め、分かりやすく報告することができる。
〔言語についての知識・理解・技能〕

3 単元設定の理由

- (1) 単元について…略
- (2) 児童について…略
- (3) 指導について

本単元では、子どもが抱いた新鮮な驚きや感動・疑問などを大切にしたい。子ども一人一人が、自分の知的好奇心に基づいて興味深い話題や疑問について主体的に読み調べていくことを大切にしたい。したがって、学習過程を固定的に考えず、子どもたちの学習状況に応じて弾力的に展開できるようにして、子どものよさを生かし、伸ばし、高めるように工夫する必要がある。そこで、次のような学習過程の工夫が考えられる。

- ① 自分の課題を持って追求する問題解決の学習過程を工夫していく。
(単元の見通しを持った自己評価カード・一人学びのヒントカード)
- ② 一人一人の学習ペースに対応できるゆとりある学習時間を確保できるように工夫する。
(ワークシートの工夫・時間の保障)
- ③ 一人一人の試みに共感し合ったり、助け合ったりできるような場や機会を工夫する。
(相互交流・よいところ発見カード)
- ④ 学習活動の中で獲得した知識・理解が、他の学習において生かされるように工夫する。
(学習方法を認識させるワークシートの工夫)

日	学習すること	楽しくできた	進んで学習した	手を進んで進んだ	分かった・もつと調べたい
1	「一本の鉛筆の国二つに」 感嘆を話し合う。	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
2	読み取ったことをまとめる。 学習の計画を立てる。	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
3		◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
4		◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
5		◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
6		◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
7		◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	
8	特別賞しホームパーティー	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	

4年2組

学び方のヒント

4年2組

課題発見

① **おぼやっ?**
不思議だな
へんだな
わからないな
知りたいな

② **なぜ?**
何を?
どんな方法で調べる?

③ **わかった!**
なるほど
そうだったのか
おもしろいぞ

④ **つぎは?**
もっと知りたい
やればできる

↑ 新しい発見 ↓ 調べてみよう

← わかったことをまとめよう →

情報をメモしよう。
「わかったことを、自分の言葉にして、短く書く。」
大事な側やイラストを写す。

どこの国のどんなことを調べようかな?

どこ の 何 について どの方法 で調べる。

くらしが日本とのつながり
・学校のこと ・家のこと ・食べ物のこと
・服装のこと ・遊びのこと ・仕事のこと

びっくりしたこと
不思議に思ったこと
など

「世界に目を向けて、海外特派員になろう」学習計画・自己評価表

4 指導計画（8時間）…略

5 本時の学習（6／8時間）

(1) 本時のねらい ○必要な情報を整理して、工夫して発表することができる。

(2) 授業仮説

情報交換の場において

① 特派員メモをもとに、グループで役割分担や発表の手順を話し合わせることで、調べたことや感想を意欲的に発表することができるであろう。

② よさを認め合うことにより、自分の考えや活動に自信を持ち、学ぶことの楽しさを味わうことができるであろう。

(3) 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 ・ 個 へ の 対 応
<p>1 詩の暗唱 「あいたたた」（谷川俊太郎） 「かく」（川崎洋）をリズムカルに暗唱する。</p>	<p>★安心して声を出す雰囲気づくりと、「これから始めるぞ」という意欲を高めるために。 ★「あ」の口形カードを示し、口をしっかりと開けること、声をはっきり出すことを促す。</p>
<p>2 本時の学習内容を知り、めあてを持つ。 (1) 「学習計画表」で学習内容を確認する。 (2) 「学び方のヒントカード」で学習方法を確認する。 (3) 「よいところ発見カード」で発表の仕方や聞き方を確認する。 ・調べた内容が相手によく伝わるように話す。 ・分かったことや感想をメモしながら聞く。</p>	<p>★主体的に学習を進めていくために、学習内容や学習方法を振り返らせる。 (情報交換の場の設定) ★発表の仕方や話の聞き方のめあてを確認させる。 ★友達のよさから学ぶことが大きいことを知らせ、視点を確認させる。</p>
<p>3 特派員メモをもとに、調べたことや感想を国ごとに発表する。 ・役割分担を工夫して発表する。</p>	<p>★発表の時間を全員に保障するために、一つの班の発表所要時間を2分間に限定する。 ★「よいところ発見カード」を使って評価させることにより、聞き方や、よさを見つける観点を持たせる。 〔授業仮説①の検証〕</p>
<p>4 新しく得た情報や、見つけた友達のよさを交流する。</p>	<p>★学習の進め方を振り返るきっかけとする。 ★よさを指摘することで自信をもたせる。 〔授業仮説②の検証〕 ★教室の前スペースに集まって交流させることにより発言がしやすい雰囲気にする。</p>
<p>5 本時の学習を振り返り、次時の学習活動を確認する。 (1) 自己評価をする。 (2) 次時の学習を確かめる。</p>	<p>★自己評価をすることにより、本時のがんばりを認め、次時への意欲を高める。</p>

6 授業要旨の流れと考察

(1) 授業仮説①の検証

<授業の流れ>…抽出した2グループ

T：では始めましょうね。みんなが発表できるために、短いですが時間は2分間にセットします。1番、シンガポール特派員どうぞ。

C：私たちは、町並みや買い物の様子を発表します。

(3人でレポーター風に、イラストや物の値段表を示して発表。)

発表が終わると同時に2分経過のタイマー音が鳴り「オー」という歓声がある。

T：すごい！ピッタリの時間だね。練習をしたのね。さあ、声の大きさはどうでしたか。分かりやすかったかな。ためになったかな。

C：(感想等をつぶやきながら、「発見カード」にメモをしている。)

～略～

T：カナダ特派員どうぞ。

C：私たちは、カナダの生活と食べ物について調べました。〇〇さん、カナダはどこですか？

C：(世界地図で示しながら)ここです。

C：△△さん、カナダの食べ物についてお願いします。

C：はい。(メモを見ながら料理の特徴を発表する。)

C：私は、生活の様子をいいます。

(暗記していて、メモを見ずに発表)

C：これで、私たちの発表を終わります。

(席に戻ると、隣席の子に「よく聞こえた?」とたずねている。)～略～

<考察>

2分間という、表現の工夫をするには無理のある限られた時間の中で、子どもたちは発表のために下のような工夫をしていた。

- 役割分担 (司会者・発表者)

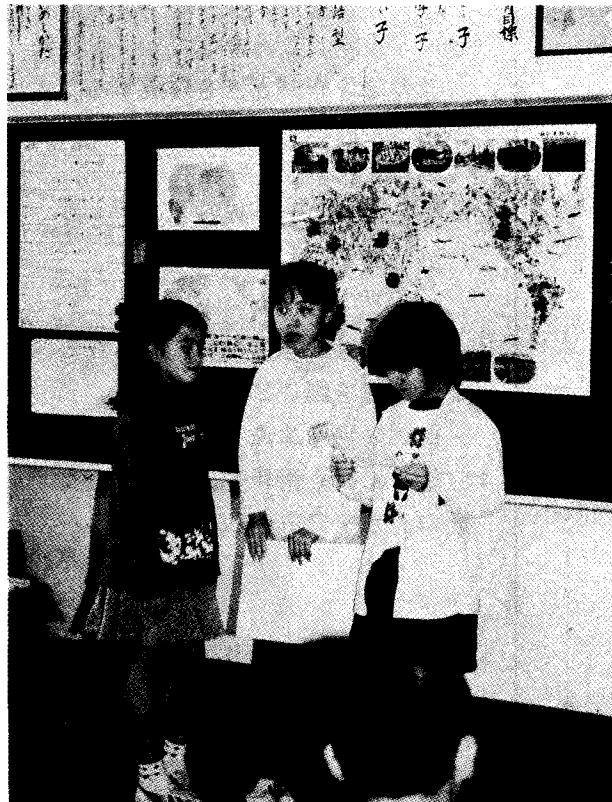
- 視覚に訴える資料の提示

(表やイラストなど)

- 発表の手順 (位置—情報—感想)

また、発表の段階ではどの子も落ち着いて堂々と発表をすることができた。

以上のような事実より、特派員メモをもとにして、グループ内の発表の役割分担や資料提示の工夫などがスムーズに行われたことが意欲的な発表につながったと考えられる。発表で大切なのは、目的意識と役割分担、更に資料提示の工夫が行われるように前もって話し合わせることが重要な手だてとなると考える。



(2) 授業仮説②の検証

<授業の流れ>

教室の前スペースに集まり、床に腰をおろす。

～略～

T：お友達が調べたことや発表の仕方
で、いいところを見つけた人はいま
せんか。

C：シンガポールを調べたグループは、
絵や表をかいていて分かりやすかつ
たです。

T：そう。1グループさん聞きました
か？絵を描いたり値段を数字で表し
たりしていて分かりやすかつたそ
うですよ。

C：7グループは中国の体育着のこ
とを絵に描いていてためになりました。

T：色や形がよくわかつたのね。

T：アフリカ特派員は最後に自分の考
えを言っていましたよ。何だっけ？

C：アフリカに動物が多いのは、自然
が多いし肉を持っている動物が多い
から。

C：肉食動物の餌になる動物が多いか
らだよ。

T：ただ動物が多いというだけでは終
わっていないね。なぜ動物が多いの
か、自分の考えを言っていたね。

C：これ、言おうかなあ。

(小さな声でつぶやく子がいる。)

T：〇〇さん、どうぞ。

C：(他の子が) 〇〇はいっぱい言っ
ているなあ。

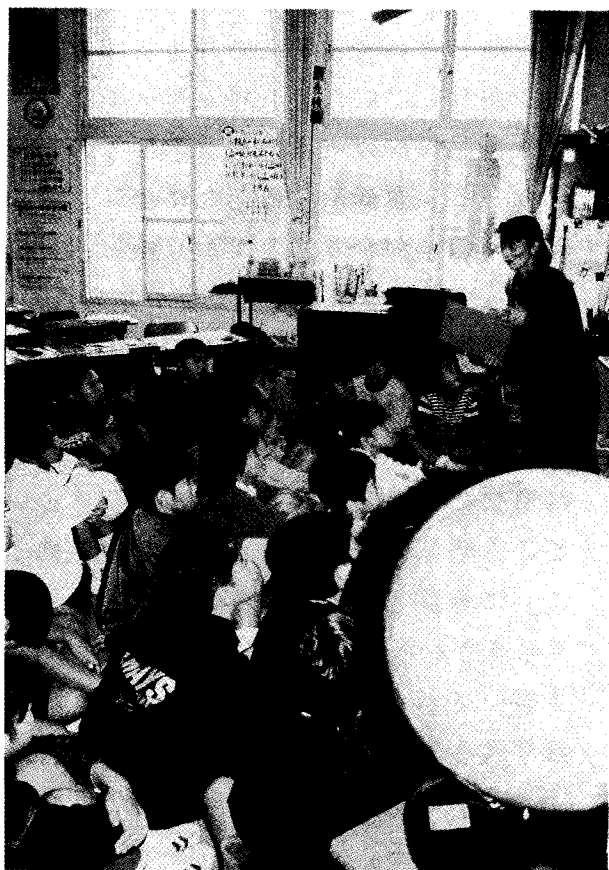
T：そうよ。たくさん発見したのよ。

C：カナダの発表で、親子でもホッケ
ーが人気があることを知りました。

<考察>

授業後の自己評価より、「楽しくできた」という項目で、◎は23人、○は11人、△は0という結果であった。楽しかったと振り返っているにも関わらず、発言は思ったより活発ではなくて教師のリードで進めていった。これは、「よいところ発見カード」の観点が態度に重きをおくのか、内容に重きをおくのか、焦点化されていなかったことが原因の一つではないかと考えられる。ねらいを明確にすることや発表に使われた資料を黒板に貼付する等、支援の工夫により発表はもっと活発になったであろう。

自分の考えや活動に自信を持たせるためには、効果的助言や発問・板書など、教師の支援の仕方が大切であると感じた。



VI 研究の成果と今後の課題

一人一人が意欲を持ち主体的で積極的な活動を展開するための手だてとして、安心して発言ができる雰囲気づくりを心がけ、自分なりの課題を持ち、追求し、相互交流する場を設定するという学習過程を組織した。

今回は、研究仮説の検証を国語の授業の中で試みたが、成果として次の4点をあげることができる。

- 1 自己の課題を設定し学習を進めていく際、子どもたちは、世界地図や地球儀、市民図書館や学校図書室の図書など種々の学習材を活用していた。このことから子どもが主体的に課題を設定し、その解決のために図書を選択し調べるといった学習過程で、自ら読み進めて解決していくとする意欲が見られた。
- 2 自分が調べたことを相互交流することにより、個人の情報をさらに広げて、他の資料と重ね読みをしたりまとめ方を工夫したりしていた。(特派員メモより)
- 3 「自己評価カード」や「学び方のヒントカード」を活用することにより、課題解決への手がかりとして取り組み、計画に沿って学習を進めていく姿が見られた。
- 4 授業後の感想で「発表をするのはどきどきしたけれど、楽しかった。」と書いている子がいた。学習形態の変化や詩の暗唱などを適時に取り入れたり、「よいところ発見カード」などにより「個のよさ」に着目し記入させることは、安心して発表させるのに有効であった。しかし、「書いてあるのに発表できなかった」と振り返る子が1/3もいたということは、「よさ」の視点を明確にするという今後の課題である。

できないことをできるようにする。分からないことを分かるようにする。だから、まちがってもどんどん発言をする。決して人のあげ足をとったり、笑ったりしない。みんなで助け合って授業にといこんでいくということが大切であり、このような学習姿勢や雰囲気がなければ、一人一人の子どもが主体的に取り組む授業はできないと感じた。

更に、成功感や成就是、それぞれの課題に応じて追求し、それを発表する場において互いの「よさ」を認め合うことにより、味わうことができる。そのことが次への学習意欲につながると考える。

本研修では、一人一人の子どもが自ら学習していく授業づくりをしたいと願い、授業の基盤としての学級経営を考えて研修を進めてきた。学級経営の機能の一つ一つには、それなりの細かい膨大な内容が含まれていて、子どもを核とした授業づくりまでは深められなかったが、学級経営の基礎的な理論に触れ、年間を通した構想ができたことは、私にとって大きな収穫であった。

今後は、意欲を持って主体的に活動する子どもの姿を求めて、今回研修したことをさらに検討を重ねながら実践に移していきたい。

《参考文献》

- * 教職研修総合特集『新学級経営読本』
教育開発研究所
- * 加藤幸次・那須正裕『意欲を高める授業』
教育開発研究所
- * 岩山薫『学級経営案の立て方』
文教書院